氏　　名	唐　念念
学 位 の 種 類	博士（国際日本研究）
学 位 記 番 号	博　甲　第　８４４８　号
学位授与年月日	平成　３０年　３月　２３日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	黒澤明映画研究―シェイクスピア翻案作品を中心に

主　　査	筑波大学　教　授	Ph.D.（文学）	今　泉　容　子
副　　査	筑波大学　教　授	博士（宗教学）	津　城　寛　文
副　　査	筑波大学　准教授	博士（学術）	平　石　典　子
副　　査	筑波大学　教　授	博士（文学）	徳　丸　亜　木

論　文　の　要　旨

本論文の目的は、黒澤明映画のうちウィリアム・シェイクスピア戯曲を翻案した映画を中心に、他国の巨匠の文学作品を翻案するさいに黒澤監督が用いた撮影手法や構図を分析し、構築された黒澤翻案映画の全体像を解明することである。とくに本論文が重点をおいたのは、黒澤がシェイクスピアの女性像を変容させたことと、翻案映画に黒澤が小道具の活用によって日本文化の要素を意図的に盛り込んだことを明らかにすることである。

そのために本論文は、序章と終章のほか、第１章から第４章までの四つの章からなる構成をとり、それぞれの章において人物像と小道具の視覚的分析を行っている。

序章
第１章　『蜘蛛巣城』――欲望と裏切りの物語
第２章　『悪い奴ほどよく眠る』――社会問題を諷刺する悲劇
第３章『乱』――混乱が尽きない物語
第４章　アジアのシェイクスピア翻案映画と黒澤映画
終章

第１章は黒澤映画『蜘蛛巣城』をシェイクスピアの『マクベス』と比較しながら、黒澤の翻案映画の特徴を明らかにする。主人公鷲津が妻・浅茅に誘導されて君主殺害へいたるプロセスが、視覚的に示されていることを分析し、強大な女性像が映像的に表現されていることを明らかにする。さらに映画独自の表現方法である小道具に関して、鷲津が背負う「ムカデ」の旗印に着眼し、黒澤が「ムカデ」によって付与した日本文化独自の意味を解明する。

第２章では黒澤映画『悪いやつほどよく眠る』とそのヒントとなったシェイクスピアの『ハムレット』の比較研究が行われている。黒澤映画の構図が、主人公西幸一（ハムレットに相当）と佳子（オフィーリアに相当）の運命を予示することが分析され、黒澤の翻案作品に特徴的に見られる強大な女性像が、ここでも指摘される。さらに、小道具として「鏡」が有効に用いられていることや、「影」の使用が日本財界の腐敗を示すことが考察される。

第３章では黒澤映画『乱』とシェイクスピア戯曲『リア王』を比較し、黒澤映画の登場人物の秀虎、楓、末などの人物造形に焦点が絞られる。秀虎はリアと異なり、過去の罪が強調されており、因果応報の思想を体現していることが明らかにされる。また、小道具の「狐の石像」に着眼し、楓が「九尾の狐」伝説における狐と結び付けられ、血なまぐさい悪行の象徴となることが解明されていく。同様に、小道具の「仏像」がもうひとりの重要な女性・末と結びつけられ、彼女の死によって現世には人間を救う術がないという『乱』の主題が暗示されることが述べられる。楓と末という二人の女性の造形は、『リア王』にはない黒澤映画独自のものであり、黒澤映画における女性像の意義が明らかにされる。

第４章では黒澤映画が、アジアにおける他の監督のシェイクスピア翻案映画と比較される。アジアにおいては、黒澤以外の翻案映画の制作が 2006 年に公開された馮小剛（フォン・シャオガン）監督の中国映画『女帝［エンペラー］』と 1960 年に公開された加藤泰監督の日本映画『炎の城』に限られることが前置きされたあと、これら二つの映画と黒澤映画との共通性・相違性が考察される。

以上のように、黒澤のシェイクスピア翻案映画の全体がショットの分析によって考察され、そこにはシェイクスピア戯曲とは異なる独自の日本的世界が構築されていることが明らかにされている。

審　査　の　要　旨

１　批評

本論文は黒澤明映画研究の成果であり、黒澤映画のなかでもシェイクスピアを翻案した作品を考察対象としている。黒澤映画研究には膨大な先行研究があるし、シェイクスピア文学研究にいたっては、さらに多くの研究が世界各国から発信されている。しかし、黒澤映画とシェイクスピア文学を交差させた比較研究は、まだ開発途上の領域であるため、先行研究の数はかなり少ない。本論文はそうしたシェイクスピア戯曲の翻案映画研究に位置づけられる。

しかし、本論文は先行研究と大きく異なるアプローチをとっている。そのアプローチとは、原作（シェイクスピア戯曲）と翻案映画の比較を実践するさいに、映画の基本的ルール（すなわち「映画の文法」）を駆使して、映画にショット分析をほどこしながら、黒澤作品の特徴を突き止めるというものである。従来の研究において実践されていた比較は、原作と翻案映画の「物語」展開の違いや時代設定の違いを明らかにすることを目標としていた。そこでは登場人物の台詞の分析に重点がおかれ、映画のなかの言葉（台詞）を原作のなかの言葉と一行ずつ対比させてテクスト分析を行うことが主流であった。本論文はそうした言葉の研究を取り入れながらも、台詞だけからは読み取れない人物表象や文化表象を、カメラワークや構図や小道具といった映画独自の要素から読み取ろうとしている。

第１章が取りあげる『蜘蛛巣城』において、鷲津（マクベス）と浅茅（マクベス夫人）の人間関係が構図の分析から読み解かれていく。ここではシェイクスピア戯曲『マクベス』における君主殺害を決意するまでのマクベスの長い独白が、すっかり削除されていることが述べられたあと、浅茅（女）が主導権をにぎって鷲津（男）を君主殺害という目標へと誘導していることが、映画から抜粋された

シーンにユニークな解釈をほどこしながら、明らかにされる。本論文のオリジナリティは、そうした鍵となるシーンに着眼できる感性と、着眼したシーンに新解釈を付与できる熟練された分析スキルに負うている。妻の浅茅が鷲津を誘導して、君主殺害を決意させるシーンとして抜粋された箇所では、浅茅の姿はいっさい映されずに、彼女の声が場全体を支配するボイスオーバーとして聞こえてくることが、まず指摘される。その声は、鷲津には二つの選択肢があることを告げるが、その声に導かれるようにして鷲津は画面の「中央」の位置から画面の「左側」へ移動するところが撮られ、最初に鷲津の左右に一つずつ襖の出口のうち、「右側」の出口はスクリーンから消えてしまい、彼が二つの選択肢から「一つを選んだことを暗示する」と結論づけられる。こうしたカメラワークの分析から解釈を引き出すことは、先行研究に存在しないアプローチであり、黒澤の翻案映画を研究する新たな方向を切り開くものである。

さらに、本論文は映画における小道具の活用に注目し、たとえば鷲津の旗印である「ムカデ」がたえず彼の身辺に見え隠れしていることを突き止め、ムカデの象徴的意味を「平将門の乱」にまで遡って解き明かそうとする。こうした小道具への着眼によって、黒澤映画における日本文化表象を解明する手法は、本論文が確立したオリジナルなものである。

第２章と第３章では、『悪い奴ほどよく眠る』と『乱』が詳細に分析され、それぞれの映画における主導的な女性像と小道具の効用が解き明かされていく。とくに『乱』における小道具「狐の石像」に関する考察は卓越したものであり、「九尾の狐」伝説を黒澤映画に読み取ることによって、楓という女性像の本質を明かしている。本格的な黒澤の翻案映画研究の進展が望まれる現在、本論文はひとつの有意義な方向性を提示している。

本論文は力作であるが、問題がないわけではない。第４章の議論が他の章より弱く、『ハムレット』の翻案映画として黒澤以外の二つのアジアの映画が取り上げられているが、それらと黒澤映画との比較から独創的な結論が導き出されているとは言い切れない。シェイクスピアの翻案映画は、アジアよりも欧米において活発に制作されてきたのであるが、そうした欧米のローレンス・オリヴィエ、ケネス・ブラナー、オーソン・ウェルズ、フランコ・ゼフィレッリをはじめとする監督たちの翻案映画を視野に入れれば、黒澤の翻案映画の特徴をもっと際立たせることができたかもしれない。

とはいえ、映画の視覚的要素に着眼し、映画の文法に基づいた斬新な分析手法を駆使して独創的な解釈を展開した本論文の成果は、極めて優れたものであると判断される。

２　最終試験

平成３０年１月２３日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

３　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（国際日本研究）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。